

以上極めて難駁な紹介をし却つて學士の力作を害ふかを恐れるが、何れ多くの時間を得て丹念に熟讀し、再び筆をとる積りである。

斯くて滿洲語界にも最高の譯書を得た譯で充分慶賀されてよく、且つ滿洲語研究の水準の高さを誇り得ると思ふ。

私は江學士の譯を紹介するに當り、他の勞作即ち羽田辭典、藤岡博士譯滿文老檔、今西學士對譯滿洲實錄を詳細に紹介批判する積りであつたが、充分な用意と暇がなかつた爲に、果し得なかつた。何れ果す積りである。(三田村泰助)

蒙古世系譜

民國二十八年八月排印五卷一冊二十七葉

私はこの書物に就いて語る何等の智識も持ち合はせてゐない。私は本書に就いては、張爾田氏が「蒙古源流と大差ない、唯十二強汗の名のみは、この書がひとり具有するところで、或は元初掌故者の一助ともならうか」との意味を述べてゐる以外、まことに何も知らないものである。たゞかつてこの書物が私の近邊で相當

騒ぎ求められたといふこと、それから西齊雜著二種の著者である蒙古人博明がこの書物を有つてゐたといふことの故にのみ、從來寫本でしか傳はらなかつた本書が、今度北京で印刷になつたといふことだけを紹介しておき度いのである。

私がこの書物の希珍なものであることを教へられたのは(重要なものと仰言つたかどうかは今思ひ出せない)故内藤湖南先生からで、たしか昭和九年はじめ頃のことだつたかと思ふ。それは丁度先生がこの本を手に入れられたときで、私は怠けて一向しなかつたが、同學三田村君はこの本に就いて色々先生に質してゐた様だ。間もなく先生はおなくなりになつたのだが、おなくなりになつてから、先生はあの珍本を御所藏になつてゐた、是非見ずんばある可からずといふ様なことで私近邊の勉強家達が騒ぎ出した。騒いだが、あの先生の幾百萬卷からの御藏書の中からは、たつた一冊ペラ〜とこの本はどうしても出て來なかつた。それから五六年経つて今年の夏末、東大の和田先生が研究上の御要務で當地にお出でになつた。一日先生のお伴をして燕京大學の鄧文如教授を訪問した。たま〜和田

先生鄧教授に向つて、若しや蒙古世系譜なる書物を御所持にならないかと問はれると、有ると言下、出して來られたのは、紛れもないこの本だつたわけである。

この本は鄧教授の御好意で、私にまで青寫眞本一本を送られたのであるが、實はこの時分排印本は已に出來てゐたのである。

こんなことで、私にとつては何にも分らないこの本が、妙に懐かしいものになつたのだが、更に今一つ、この本の一部を博明がかつて藏してゐたといふことが私の興味を起させた。刊本の趙爾田氏の跋にも見えてゐるが、鄧教授の所藏本はもと、西齊博明所藏するところの舊鈔本である。この博明といふのは、西齊雜著二種（西齊偶得、鳳城瓊錄）の著書。兩者は今でこそ國學文庫本で、さして高くもなく買へるが、以前は稀賸の要書、滿蒙研究の好材料であり乍ら容易に手に入らなかつた。それが何時だつたか、鳳城瓊錄の刻本を手に入れることが出來て大いに喜こんだ。喜こんだが機縁で以來西齊は私の頭のどこかにこびりついてゐた。それがたま／＼又この蒙古世系譜で出て來た。

西齊の傳に就いては、私は、西齊雜著二種に翁方綱

が序して述べてゐるところと、李潛の清畫家詩史中に見えてゐるところと以外に、今のところ知らないが、これ等によれば彼は博く經史に通じ、滿蒙西域の文字閑習せざるなく、又繪をよくしたとある。姓は博爾濟吉特、博明は名、字は希哲（又晰齋とも書く）、蒙古人で乾隆代の人である。著に西齊偶得、鳳城瓊錄のあることは前述の通りであるが、清畫家詩史は西齊偶得を擧げず、著には鳳城瓊錄、西齊詩輯遺があるとしてゐる。彼が滿蒙の學を善くしたことは疑ひを容れず、されば彼が稀書蒙古世系譜一本を所藏してゐたことにも淺からぬ思ひがかけられる。西齊に就いてはもつと知り度いと思ふ。翁方綱の序を便れば、も少し知り得るのではないかと思はれる節もあるけれども、今一寸勉強しにくい。柄にもない蒙古世系譜など、かつぎ出したのも、實はこんなことでも書いておけば、私自分で勉強しなくても、或ひはどなたかの御教示が得られるだらうと思つてのことで、虫のよさは切に御諒恕あり度い。（今西春秋）